

北部ボルネオの近代化とキリスト教諸教派の活動

石 井 眞 夫

【要旨】キリスト教諸教派の布教活動は植民地時代以降のボルネオ社会に大きな影響を与えてきた。現代ボルネオ社会を語る時、キリスト教会がおよぼすさまざまな影響を考慮に入れられないわけには行かない。本稿はインドネシア領とマレーシア領、ブルネイ王国に分割されたボルネオ島の地域格差やキリスト教布教活動の相違を念頭に、主として北ボルネオ（東マレーシア）でのキリスト教布教活動の実情とそれが北ボルネオの近代化におよぼす影響を記述する中で、山地民ダヤクのキリスト教への改宗過程を考察しようとするものである。人類学の諸研究では外来宗教としてのキリスト教が、現地文化に断絶的影響を与え、生活様式と価値意識に変革をもたらしたという側面に注目することが多いが、北ボルネオ社会へのキリスト教の浸透は、植民地時代以降徐々に進行する近代化と切り離せないものであり、改宗を受け入れた人々にとっては日常生活の中で進行しつつある変化でもある。本稿はこうした北ボルネオ社会のキリスト教布教と受容過程を多面的に考察しようとする試みである。

1. はじめに

植民地時代以降の社会変化、近代化と言われる社会変化に、世界の多くの地域でキリスト教の布教活動が関与してきたことについては、これまでも多くの指摘がなされてきている。本稿が取り上げようとしているボルネオ島でも、19世紀以降のキリスト教布教活動はその後の国民国家成立過程と今日の社会生活の在り方に大きな影響を与えてきている。

グリーンランド、ニューギニアに次ぐ72.5万km²の広大な面積を持つボルネオ島は、現在三つの国家（領土）に分割されている。ブルネイ王国とマレーシア領のサバ州、サラワク州、インドネシア領のカリマンタン五州（西カリマンタン州、中部カリマンタン州、南カリマンタン州、東カリマンタン州、北カリマンタン州）である^①。自然環境だけでなく、それぞれの国家の政治的、経済的事情により、現在の社会的状況が大きく異なるのは当然のことであり、また、同じインドネシア領に帰属しているとは言え、五つのカリマンタン諸州は社会状況、とりわけ民族状況が大きく異なっている。

こうした国家間の違いは主として旧宗主国の植民地政策と現代国家成立後の政治的・経済的事情によって生じたもので、ボルネオ島全体は広大な面積にもかかわらずいくつかの基本的特徴を共有している。ボルネオ島では山地住民はダヤク（Dayak）と総称されており、海岸部から大河川流域沿いに住むマレー人と対比されている。山地民ダヤクは焼畑を主とする陸稲耕作農耕民で、長屋式の集合住居（杭上長屋、ロングハウス）に居住、首狩慣行をもつ人々で祖霊・精霊を信仰していた非イスラム教徒である。マレー人は海岸平野部から河川沿いに水稲耕作を営み、戸建のマレー式杭上家屋に住み、集落を形成、イスラム教徒である。

現在のボルネオでは、ダヤクもマレーも民族名として扱われ、強弱はあるものの帰属意識を持つことが多い。しかし、文化的特徴を共有しダヤクと総称されては来たものの、広大なボル

ネオ島山地に分散して住んでいたダヤク全体に共通の帰属意識や集団としてのまとまりがあったわけではない。また、同様にマレー人も共通の帰属意識や集団としてのまとまりがあったわけではない。そもそもボルネオでは「マレー」、「マレー人」という名称・概念自体が植民地時代に外部から持ち込まれたものである。ダヤク、マレーといった名称や集団帰属意識がどのような過程を経て成立したか、つまりダヤク族やマレー人といったような民族集団の成立過程については本稿では扱わないが（石井 2009 参照）、キリスト教宣教師の視点からは、非イスラム教徒であったダヤクが恰好の布教対象とされたことは容易に理解出来るだろう。こうして外部から導入された民族分類様式とキリスト教布教が今日の民族意識の成立に寄与し、イスラム教に対するキリスト教といった対立図式を作り上げて来た。

キリスト教布教が現代ボルネオ社会の形成、特に民族意識と民族集団関係を作り上げるのに大きな役割・機能を果たしたことは多くのボルネオ研究で指摘されている点である。世界の多くの地域での民族意識研究と同様、ボルネオ研究でも集団への帰属意識が自他の境界設定と排除／包摂のメカニズムによることは、国民意識（ナショナリズム）、民族意識、植民地主義、ジェンダーや宗派帰属などの諸問題を扱う際に主要な課題の一つとして扱われてきている。こうした視点は、人類学では F. バースの古典的な民族意識研究に遡ることが出来るが、J. コノリーは、それはボルネオ社会へのキリスト教の影響という点では一面に過ぎないと指摘する。バース自身が後年アップデートしたように、民族意識や集団帰属意識を議論する際には、集団が文化的に分化して行く過程を相互に関連する三つのレベルで考察せねばならない。第一に、個人が日常生活の錯綜した人間関係の中でどのように判断し行動するかというミクロなレベル、第二の中間レベルは、集合的な帰属意識がどのように生まれ維持されて行くか、そして第三のマクロなレベルは地方政治から国家を超えた集団についてであるという（Connolly 2009: 493-5）。コノリーは、これまでの研究が後二者の研究に偏りがちだったことを指摘しつつ、自身の調査による東カリマンタン州の事例から、キリスト教徒とムスリム、あるいはダヤクとマレーといった集団帰属意識が、家族関係や信仰心といった個人的日常生活での判断に大きく左右され、ミクロ・レベルの研究が重要であることを強調している。

次節以下に見て行くように、確かにボルネオのキリスト教布教と現代ボルネオでのキリスト教諸教会の在り方は多様な側面を含み持っている。ボルネオでの最初のキリスト教布教記録は 16 世紀まで遡るが、組織的な布教活動は 19 世紀初頭からである^②。しかし、イギリス、オランダの植民地統治者達はいずれも熱心な協力者ではなかった。マレーシア領（旧イギリス植民地）でもインドネシア領（旧オランダ領）でも、山地民ダヤクを中心にキリスト教改宗者が大きく増加するのは植民地独立後の 1970 年代以降で、マレーシア領サラワク州、サバ州では、政情が安定する 1980 年代以降に急速に信者数を増やしている。

インドネシア領では、この時期はスハルト政権によるカリマンタン開発と国内移民政策が推し進められていた時期である。しばしば「開発独裁」政治の典型例とされるスハルト政権のカリマンタン開発は、人口過剰で耕地不足に悩むジャワ島やバリ島、南スラウェシから、人口希薄で未開発のボルネオ（当時はカリマンタン四州）へ人口を移動し、開発を進めるとともに未開地住民にインドネシア国民意識を植え付けることが目的だった。こうした開発政策は、先住民ダヤクと移住者の間にさまざまな軋轢を生み出すことになる^③。

スハルトの軍事独裁政権が崩壊した後も、開発が進むカリマンタン諸州へ豊かさを求めての人口移動は続いている。特に石油資源が豊かな東カリマンタン州の人口増加は顕著で、年率

3.8%とインドネシア平均の1.49%を大きく上回り、2000年に約240万人だった州人口が2010年には約350万人に達している^④。近年のインドネシアのこうした社会変動は、いやが上にも先住民ダヤクを周縁化し、少数民族化へと追いやることになる。多くの外来移住民はイスラム教徒であり、そうした社会状況の中で、キリスト教化は先住少数民族ダヤクにとって結束と民族意識を高揚させる機能を果たしているみることが出来る。

こうしてインドネシア社会総体での変化が進む中で、ミクロのレベルで日常生活を見るなら、多数のジャワ人やバリ人などの流入によって、ジャワ人などイスラム教徒（バリ人はヒンドゥー教徒）とキリスト教徒（ダヤク）の相互交流は活発になり、個々人の生活の中でも日常の付き合いが密接になりつつある。異教徒間の通婚件数は人口増と比例して増えていると推測され^⑤、宗教帰属の選択は日常生活に大きな影響を及ぼすようになっている。

マレーシア領のサラワクとサバでも同じような社会状況が生み出されている。マレーシア領ボルネオ、すなわち東マレーシア、あるいは北ボルネオでは確かにマレーとは原理的にムスリムであり、ダヤクとは原理的に非ムスリムと定義されている。そして、現在のボルネオでは非ムスリムの大多数はキリスト教徒である。こうした原理にもとづいたら、キリスト教布教と信者の獲得はボルネオ民族問題と不可分の関係にあると言える。しかし、欧米人が「アニミズム」と呼び習わす旧来の信仰体系を捨ててキリスト教に改宗するダヤクの人々は民族対立を前提に、自覚的にキリスト教に入信したわけではない。また、イスラムに対する敵愾心があったとしても、キリスト教宣教師達は民族意識をかき立てるために布教活動を進めたわけではない。ボルネオのキリスト教諸教派の布教活動やキリスト教への改宗過程を見ると、布教活動をめぐる状況も改宗動機も多様である。

ボルネオでのキリスト教諸教派の布教活動はなぜ、どのような動機が始まったのか。布教活動（ミッション活動）の目的や布教意図とは別に、ダヤクを中心とする受容者側はそれをどのようにとらえ、どのような動機で改宗したのか、あるいは改宗とは何だったのか。そしてボルネオ社会にとってキリスト教とは何だったのか。本稿は、主として東マレーシア・サラワク州の事例を通じて、北ボルネオ（マレーシア領ボルネオ、あるいは東マレーシア）のキリスト教布教の多様性を記述、考察することを目的としている^⑥。

2. サラワク、サバのキリスト教と植民地政策

東南アジア社会は、スペインとポルトガルの支配が長く続いたフィリピンと東チモールを除けば、他の多くの地域でキリスト教徒は少数派である。大陸部東南アジアでは仏教徒が国家・社会の多数派を占め、島嶼部東南アジアではムスリムが多数派を占めている。本稿で扱っている、マレーシアとインドネシアも信教の自由は保障されているとは言え、マレーシアはイスラムを国教とし、インドネシアも国民の八割近くはムスリムである。そうした中で、ボルネオは例外的に人口比に占めるキリスト教徒の割合が多い地域である。

インドネシアでは、スマトラのバタク高原や北部スラウェシ、ニューギニア島西半分を占めるイリアンなどでキリスト教徒数が多いが、国内移民によるイスラム人口の増加によってキリスト教徒数の比率は減少しつつあり、地域政治の中で優位な地位を占めているとは言い難い。

こうした周辺の状況を見るなら、東南アジア諸社会の中でサラワク、サバは例外的な事例であると言うことが出来る。マレーシア全体ではキリスト教徒の比率は9.2%で総人口約2,617

万人のうち約 240 万人がキリスト教徒⁷⁾だが、サラワク州ではその比率は 44.18%に、サバでは 31.5%にのぼる。特にサラワクでは、イスラム教徒は 71 万人（人口の 30.16%）に過ぎずキリスト教徒数 104 万人を大きく下回っている。キリスト教徒の多くはダヤクと総称される山地民、あるいは山地民の子孫達だが、民族集団別に見たサラワク人口の最大多数はイバン（旧称「海ダヤク」）で人口の 30.3%を占めている。なお、他の民族集団の人口比率はマレー人が 24.1%、華人系が 24.5%で、マレー人はすべてムスリム、華人系の 36.1%がキリスト教徒（55.4%が仏教徒）である。連邦国家であるマレーシアでは連邦を構成する諸州の自律性は比較的高く、サラワク州とサバ州ではキリスト教徒はマイノリティーではない。また、サラワクではイバン、華人系、マレーが人口比率で拮抗しているわけだが、他のダヤク系諸民族もキリスト教徒が大多数を占めており、キリスト教徒であることが地方政治の中でかなり重要な意味を持つことを示している。サラワクでもサバでも、民族対立や宗教対立といえるような事件が起きることはほとんどないが、州や各地域の地方政治では民族集団が政党の基盤となっており、宗教教派の活動や民族協会は地方選挙では重要な役割を果たしている。

このように、マクロな視点から見ると、サラワクでもサバでも、キリスト教は山地民の民族としての結束と民族意識の高揚にかなりの役割を果たしてきたことが、また今日でも地方政治や地域の社会生活上に大きな意義も持ち続けていることが理解出来る。しかし、キリスト教の布教活動は、元来はキリスト教的救済と福音の伝道を目的としたもので、今日のように地方政治や地域社会の中で何らかの役割を果たす目的でされたものではない。

サラワクでキリスト教会活動が始まったのは 1848 年のことである。ジェームス・ブルック (James Brooke, 1803-1868) が現在のサラワク州都クチンに入植、後にブルック三代の王朝を築くことになる植民地経営を始めて間もない頃である。初代ラジャの J. ブルックの求めに応じてクチンに入植した宣教師は聖公会（イギリス国教会、Anglican）から派遣されたフランシス・トーマス・マクドゥーガル (Francis Thomas McDougall, 1817-1886) である。マクドゥーガルはクチン市中心部の丘に教会施設用の土地を与えられ、教会堂、学校、病院などを建て布教の基礎をつくった。マクドゥーガルは後に、クチンばかりでなくラブアン・サラワク教区の初代主教に任命され、この教区は 1869 年には海峡植民地教会として独立教区となってラブアン、ブルネイ、北ボルネオ（現在のサバ州）の布教に大きな役割を果たすことになる。

しかし、J. ブルックが聖公会教会をクチンに招いたのは、ボルネオへの布教のためではなかった。イギリスのマレー進出の拠点シンガポールから遠く離れた熱帯雨林の未開地に入植したイギリス系入植者達が、何より求めたのは精神的拠り所としての故郷イギリスの教会だったからで、司祭であるとともに医者でもあったマクドゥーガルはサラワク開発の推進者として恰好の人物でもあった。

サラワクが植民地として安定した発展期に入るのは 19 世紀末、初代 J. ブルックの後を継いだ甥のチャールズ・ブルック（在位 1868-1917、Charles Anthoni Johnson Brooke, 1829-1917）が第二代のラジャ（王）に就任してからである。華人入植者の反乱を鎮圧し、平地部から山地住民ダヤクを制圧するとともに、それまで名目的にはブルネイ王国の支配下にあった北部ボルネオを次第にサラワク領へ編入し「領土」を拡大していった。奥深い内陸山地を背後に持つボルネオでは、山地民ダヤクは常に平地権力に対して反抗的だった。ブルック入植以前のブルネイ王国も山地民ダヤクの反乱に手を焼いていたが、C. ブルックは近代兵器とともに巧みな戦略で山地民の反抗を鎮圧していった。ボルネオ山地が産出する熱帯雨林山地の産物は古くから

高価な交易品として取引されてきた。香木、ラタン、樹脂、蜜蝋、犀鳥の羽や嘴、犀の角、山地米などで、これらは山地民社会の経済的基盤でもあった。C. ブルックはこうした従来からの山地産物に加えて、山地にプランテーション作物を導入し、サラワク経済の基盤にしようと努めた。そして平定した山地住民ダヤクに輸出用商品作物として胡椒栽培などを奨励した。こうした山地の開発には山地民社会の安定が何より必要である。

C. ブルックの時代は、彼自身の回想によると三つの時期に分けられる。初期の 1850 年代から 1865 年頃は山地の首狩族を武力によって鎮圧した時期で、1878 年頃までの第二期は内陸ダヤクを武力鎮圧する軍事的遠征のかたわら、平和と安定に向けた施策を行った時期、そして晩年の第三期は政治的安定とともにサラワクの経済的・商業的發展を目指した時期である (Tan Jin Huat 2012: 24-25)。そしてカソリックの布教が始まったのはこの第二期、サラワクが内政の安定と経済的發展へと向かいはじめた 1881 年である。先代ラジャの叔父 J. ブルックと異なり C. ブルックは聖公会以外の教派の布教を奨励した。異なる教会に異なる役割を与えサラワクの開発に役立てようとしたためである。また、聖公会教会との諍いから、非アングロ・サクソン系の宣教師を好んでいたともいう。いずれにしても、キリスト教布教活動に政治的役割を期待し、ダヤクを改宗させることは内陸部の安定と発展にとって有益であるとみていた (ibid: 27-35)。

1904 年にはメソディスト教会の布教がルジャン川 (Rajang または Rejang、地図参照) 下流のシブ周辺で始まる。C. ブルックはこの周辺に福州から集団移住させた華人農民を計画的に入植させ、水田開発を試みさせた。この時に移住民のリーダーだったのがメソディスト教会牧師の黄乃裳だった。この水田開発は結局失敗に終わり、福州人達は胡椒やゴムなどの商品作物の栽培に転換し成功する。福州人は今日では運輸、不動産、建築、金融などあらゆる分野に進出し都市部を中心に多くが活躍している。そしてメソディスト教会は都市部で福州人を始めたとした華人達の間に浸透している。

ブルックの宗教政策は現実的なもので、サラワク政治への教会の介入を厳しく禁じただけでなく、教会活動を政府の管理下に置いた。キリスト教会の活動は宗教的理由からではなく現実的な観点から管理した。つまりサラワクの安定と経済的發展にどう役立たせるかという観点から各教派の布教地域に制限を設けた。新来のカソリックには、かつてクチンのブルック政府に海から襲撃を繰り返しその後鎮圧された「海ダヤク (現イバン)」が住むルジャン川流域の布教を担当させ、クチン周辺と南部の後背山地に布教を進める聖公会布教と重複しないようにした。そしてカソリックやメソディストが布教するルジャン川流域やシブ周辺では聖公会の活動を禁止した。これは教派どうしが布教をめぐる対立することを避けるためでもあった。

この教会活動の「縄張り」あるいは「棲み分け」は、

【北ボルネオ地図】



第三代ラジャ、ヴァイナー・ブルック（在位 1917-1946、Charles Vyner Brooke, 1874-1963）の時代には緩和されるが、結果として今日でもかなりの地域で「棲み分け」は残っている。

このように、初期の布教活動はサラワク政府の政策と密接に関わっている。初代の J. ブルックの時代、ブルック統治の初期には、政府はクチン周辺から平野部に住むムスリム住民（ブルックは彼らをマレー人と呼んだ）の生活にはほとんど関与しなかった。武力で反抗するダヤクの鎮圧に手一杯だったため、従順なマレー人の生活に関与する余裕も必要も無かったことと、ブルック統治の末端の官吏や兵力として利用するために不要な軋轢を避けるためだったとも言える。しかし、C. ブルックは叔父とは異なって、平野部から河川流域溪谷部に住むマレー人へも積極的に介入した。

まず、反乱鎮圧の方策の一つとして、マレーとダヤクの区分を明確にするため、混住を禁じ居住地を分離した。元来、海岸平地民と山地民の文化的相違はそれぞれの生態環境に適合した生活様式の違いから来るもので、本質的な相違があるわけはなかった。山を降りて水田耕作や商業に従事するようになった山地民は、やがてイスラムに入信し平地民に溶け込んでいった。当然その逆の過程もあった。河川沿いに内陸に入った溪谷盆地の交易拠点にはイスラム教徒平地民と山地民ダヤクが混住し、彼らは内陸山地の産物と下流の平野部からの物資を中継していた。マレー人（Malay）という概念が、特にボルネオでは従来から漠然と山地民を指す用語として使われていた「ダヤク」との対比の中で、現実のマレー民族集団名として成立するのはこうしたブルック政府の政策が深く関与していたと考えられる^⑧。さらに、キリスト教の布教が内陸部を政治的・経済的に安定させるための施策として積極的に進められ、主として内陸部ダヤクを対象に進められたことがこうした民族集団成立過程に大きな影響を与えた。

こうして見てくると、サラワクでのキリスト教布教の進展は、まずイギリス人を主とする入植者への教会サービスをきっかけとして始まり、やがてサラワクへの近代的社会システムの導入・安定化、そして商品作物の栽培など植民地経済の発展を目指した開発政策と密接に結びついていたと理解することが出来る。

1881 年から太平洋戦争による日本軍の占領まで、イギリスの北ボルネオ会社（British North Borneo Chartered Company、本稿では「北ボルネオ会社」と記述する）が統治したサバでも状況はほぼ同じだった。サバはほどなくイギリス保護領となるが、北ボルネオ会社の植民地経営は続いていた。サラワクのブルック政府同様、北ボルネオ会社ももっぱら会社従業員と会社関連の欧米人の要望に応え、教会サービスを提供するために本国から聖公会司祭を招いた。カソリック教会も 1890 年代に布教を開始するが当初は入植者が主たる対象である。サラワクと同様、本格的なキリスト教布教のきっかけとなったのは、やはり植民地経営の発展を目指しての植民地への近代的社会システムの導入、植民地社会の安定化策と密接に関わっている。

聖公会とカソリックに続き、サバに入植したのは香港からのバーゼル教会^⑨である。1882 年北ボルネオ会社は、中国大陸南部の客家への布教で成果を上げていた香港のバーゼル教会へ、北ボルネオでの農地開発労働者として華人労働者を入植させるよう要請した。バーゼル教会はこの要請に応え、当時は人口過剰と農地不足に悩まされていた中国大陸南部から、およそ 90 人の客家人信者が入植した。これをきっかけとして、多くの客家系信者の入植が続き、現在のマレーシア・バーゼル・キリスト教会（Basel Christian Church of Malaysia, BCCM）の基礎となった。入植した華人たちは、教会堂、学校、医療施設などを建設する。当初は入植者自身のためのものだが、やがてこうした施設は先住サバ人たちの日常生活に大きな影響を及ぼすようになる

(Basel Christian Church of Malaysia, Sandakan n.d.: 38-39)。

植民地時代初期のこうしたキリスト教会の活動は、主として植民地に入植した信者自身のために始まったものである。欧米宗主国本国の教会本部は、未開地の未開人、異教徒への福音伝道と信者数・教会勢力の拡大などを意図していたと考えられるが、植民地現地のキリスト教導入の意図は必ずしもそうした宗教的目的に沿ったものではなかった。植民地経営の安定化と将来への発展、特に経済的成功を目指す時、まず必要なことは、入植者の生活の利便性を図ることだった。当時は、コレラ、マラリアなどが蔓延していた熱帯雨林地帯の生活は欧米人にとっては厳しいものだったに違いない。同じことは未開地の開発のために入植した、主として華人系の労働者にとっても同じことで、生活の利便性ばかりでなく、新来の土地での精神的不安を取り除く施策も安定した植民地経営には必要不可欠のものだった。この時期、現地植民地政府の主たる意図は、植民地経営の促進と安定化を目指しての先住民ダヤクなどへの布教活動の促進であって、植民地のキリスト教化ではない。植民地政府は、多くの教派の布教を促進することによって、植民地経営の促進を図った。実際、この時期、19世紀末から20世紀前半の布教成果は、教会自身の誇らしげな言説にもかかわらず、後の時代と比べると小さなものだったと言わざるをえない。ボルネオのカソリック信者数は20世紀に入る1900年には1,650人だったが、1935年にはおよそ8700人に増加したが、ボルネオに経済発展の波が押し寄せはじめる1976年には24万人に増加している^⑧。

3. 社会変化としてのキリスト教改宗

太平洋戦争終了後のサラワクでは、日本軍占領時代は国外に退避していた第三代ラジャ、ヴァイナー・ブルックが復帰するが、ほどなく退位し、サラワクはイギリスの直轄植民地となる。V.ブルックの時代にはキリスト教の布教活動は制限され、マレー、ダヤクの伝統文化が尊重された。マレー半島では植民地独立に向けて1957年にマラヤ連邦が結成され、サラワク、サバとともに独立国家を目指すことになる。1963年には、マラヤ連邦、シンガポール、イギリス直轄植民地サラワク、イギリス保護領サバの4地域（植民地）がマレーシア連邦を結成して独立、サラワクとサバは連邦内の州となり今日に至っている。

1962年からはインドネシアの対マレーシア対決政策（コンフロンタシ）によって、特にサラワク州内は共産主義ゲリラによる武力衝突が頻繁に起こり、内陸山地はゲリラ活動の拠点となって政治的には不安定な時期が続く。インドネシア初代大統領スカルノの親共産主義・反米政策によるもので、カリマンタン（特に西カリマンタン州）とサラワクでは、9月30日事件でスカルノが失脚し、マレーシア・インドネシア間に和平協定が締結された後も共産主義ゲリラの活動は続いていた。サラワク州内で武装集団が完全に鎮圧され、混乱が終息するのはやっと1970年代半になってからである。この時期は、マレーシア領（東マレーシア）でもインドネシア領（カリマンタン）でも、内陸山地部への入域は厳しく制限され、危険がともなうことから外部からの布教活動は困難だった。それでも、共産ゲリラのテロ活動が及ばなかったサラワク北部やサバ州では、緩慢にはあっても外部社会からの影響は徐々に及んでいた。

こうして、ボルネオ社会全体が、自由主義圏と共産主義圏の対立（東西対立）や植民地の独立と現代国家の成立（植民地時代の終焉）といった世界情勢の変化の影響を受ける中、キリスト教会活動も大きな影響を受けていった。しかし、その一方で、ボルネオの山地民ダヤクの人々

の日常生活には大きな変化もなく、また教会活動も人々の日常生活の中では途絶えることなく連綿と続けられていた。植民地主義や国家間の対立という激動の時期、キリスト教教会活動はどのように進められていたのだろうか。

多くの民族誌記録や教会関係者が語る所によるとボルネオ全体、特にサラワク、サバでキリスト教への改宗が急速に進むのは1970年代以降である。クチン南方の後背山地に住むビダユ（旧称「陸ダヤク」）の多くは、1970年代まではガワイ（*Adat Gawai*）と呼ばれる土着の儀礼・信仰体系に従った生活をしていた。生業の焼畑による陸稲栽培サイクルと農耕儀礼、さらに死者儀礼や祖霊、精霊に関する信仰はこのガワイに依っていた。ビダユの人々が大半してキリスト教へと改宗した1970年代には、聖公会、カソリックを始め多くのキリスト教派が布教を始めてからすでに100年の年月が経過していた（Chua 2012: 513-515）。チュアはビダユの人々の改宗には深い宗教的理由や過去の文化・慣習との明確な断絶はなかったと指摘する。個人々の改宗動機は友人の誘い、周辺の村人に倣ってなど、日常生活の中でのちょっとした出来事であるという。そして、この大規模な改宗はビダユの日常生活がこの時期大きく変化しつつあったことと関連していると指摘する（ibid）。日常生活の変化とは、学校教育の普及浸透、その結果として、特に若い世代を中心に高等教育の機会を求めての都市部への移住、そして給与労働の普及と現金収入の増加などである。焼畑・陸稲栽培は次第に周縁に追いやられ、日常生活上の意義を失った。かつてはビダユ生活の中軸となって生活を支えたガワイ儀礼体系だが、サラワク州成立後の社会変化の中で、「近所付き合いの必要」からガワイ儀礼に参加する必要性が薄れ、人々の関心はガワイ儀礼体系から離れていった。

ブルック政府の基本方針は、キリスト教の布教活動を植民地政治の管理下に置き、その一方で住民の宗教生活、とりわけイスラムには介入しないことだった。ブルック政府に反抗的で悍猛な首狩族のイメージを持つイバン（「海ダヤク」）は、キリスト教布教活動（主にカソリック教会）の布教活動を通じて馴化する必要があったが、温和で政府に従順とされたビダユ（「陸ダヤク」）は介入の対象ではなかった。ビダユに対しては医療と教育の普及には力を入れたものの「伝統的慣習」はむしろ温存された^⑩。ビダユにとってはキリスト教とは接触当初から「近代医療」であり「近代的公教育」だった。キリスト教の導入とは「近代化」の代名詞で、ビダユ社会の近代化はキリスト教の受容と同義だった（ibid）。キリスト教の受容が社会の近代化と同義だった、という事実はビダユに限られているわけではない。キリスト教と近代化の一体化は必ずしもダヤクとブルック政府の関係やブルック政府のキリスト教政策と直接にかかわるわけではない。

サラワク北部、バラム川源流域に住むクラビット（Kelabit）は、現在は熱心なキリスト教徒として知られている。クラビットという民族名称はブルック政府が誤解にもとづいて名付けたもので、バラム川源流域の人々は元々は杭上長屋（ロングハウス）に分散して居住し、社会集団としてのまとまりを持っていたわけではない。しかし、今日では「クラビット族」はサラワク政府文書、概説書、観光案内などに、あたかも古くから存在した「民族集団」であるかのように登場するだけでなく、クラビット高原（Kelabit Highland）など地名としても用いられ、さらに住民自身も自らクラビット“族”としての自覚を持っている。こうした民族集団の形成は、ボルネオでは植民地時代以降の近代化現象の一つと考えられるが、ブルック政府行政官の誤解と民族政策だけでなく、キリスト教布教が深くかかわっているように思われる。

クラビットにキリスト教を布教したのは「ボルネオ福音伝道教会」で、今日でもクラビット

の大多数はこの教会の信者である。ボルネオ福音伝道教会（Borneo Evangelical Mission、略称 BEM）はオーストラリア・メルボルンに本拠を持つ福音伝道教会で、1928 年突然にサラワク北部、ブルネイ国境に近いリンバン地域で布教を始めようとした。現在のサラワク北部はマレーシアの中でももっとも豊かでな地域の一つで、豊富な石油資源と森林資源によって経済発展がめざましい地域である。しかし、この地域がサラワク領に併合されたのは 19 世紀末から 20 世紀初頭のことで、当時はまだ十分に平定されておらず首狩が行われていた。入域には相当な危険がともなうことと、そうした地域への布教を目指すボルネオ福音伝道教会宣教師達の意図に疑念が持たれたため、ブルック政府は当初布教許可を出さなかった。BEM 布教活動の成果が見え始めた 1930 年代後半には山地奥深くのクラビット高原へも布教を始めたが、ほどなく太平洋戦争が勃発したため、クラビットへの本格的な布教は戦争終結後、サラワクがマレーシアへ加入する時期になってからだった（Tan Jin Huat: 47-53）。

現在のサラワク社会では、クラビットは教育程度が高いと評価され、サラワク各界で中心的役割を果たしている人々を多く輩出している。研究者を含んだこうした人々が書き残した書籍資料には、まだ記憶に新しいキリスト教受容の過程とキリスト教布教へのクラビットの肯定的評価が書き記されている。ブルック政府によって首狩が終結し、外部社会での安全が確保されたことが何よりも大きかったが、学校での読み書きの習得、高等教育の機会、近代医療、そして出稼ぎによる現金収入とそれによって得られる科学技術の恩恵などなど、多くの生活上の変革がボルネオ福音伝道教会の布教とともにクラビット社会にもたらされた。クラビット人社会人類学者ポーリン・バラは、幼少時から小学生時代に経験した急激な社会変化についての経験を新しい世界との接触として記述している。外部世界を知らず、文字というものを知らなかった彼女が、外国語のマレー語、英語で教育を受けることを通じて、外部社会の存在を切実に感じるきっかけになったと回想している。そうした中で、1973 年に村全体がキリスト教に一斉に入信するという大きな変動を経験したという（Bala 2002: 48-53）。事実、1960 年代には千人程度に過ぎなかったボルネオ福音伝道教会の信者数は 1990 年代には 7 万 5 千人に増加した。その一方で、キリスト教の浸透は内陸山地社会の過疎化を促進している。概数だが、2013 年時点でサラワク州内に住むクラビット人は 6,600 人程度と推定されているが、クラビット高原に住むクラビット人は 1,000 人程度に過ぎない。

キリスト教が内陸山地社会に浸透する過程で起きた大きな変化は、教会の土着化ということである。太平洋戦争を挟んだおよそ 10 年間は、布教元の欧米人宣教師側（BEM の場合はオーストラリア人）から見ると布教活動が停止した空白期間となるが、サラワク北部では戦時中のこの期間にキリスト教は着実に根付いていた。布教活動も教会などの施設建設も、戦時中のこの期間に地元の人々によって進められ、キリスト教はもはや外来宗教と言い切れない状況が生み出されていたという。1958 年にはこうした実情に合わせ、公式の教会名をマレー語（*Sidang Injil Borneo*、略称 SIB）に改めた¹²。中心地がサラワク北部



ミリ市カナダ・ヒルの上に建つ SIB 教会

（本部はミリ市）にあることに変わらないが、サバやカリマンタンばかりでなく半島部西マレーシアにも勢力を拡大しつつあるのは、教会が成功裏に土着化した結果であると考えられる。ボルネオ福音伝道教会にとって内陸山地から都市部へと布教を進めることは、都市部で先行して布教を進めていた諸教会、特に華人中心の教会との対立が予想されるが、都市部に移住した山地民ダヤクとその子弟達を主な対象に順調に布教を進めているように見える。サラワク北部の中心都市ミリ市の中心に位置するカナダ・ヒル上、市の中心部からもっとも目に付く丘の上には、ボルネオ福音伝道教会が地域でもっとも有力な教会であることを示すように、SIB 教会堂が誇らしげに十字架を掲げている（前ページ写真）⁸⁾。



ボルネオ福音伝道協会（SIB）布教センター本部にて
（幹部はダヤク系）

こうした土着化は、ボルネオ福音伝道教会に限ったものではない。マレーシア連邦成立後の1970年代を境に、おそらくイスラム教徒が多数を占める連邦政府の意向から、外国人宣教師の長期滞在が困難になってきた。布教を目的とした滞在査証の延長が難しくなってきたため、外国籍の宣教師達は、マレーシア国籍の配偶者を求めて土着化するか、帰国するかを選択せねばならない結果になった。聖公会やカソリックの主流の教会にとっても同じで、多くの教会関係者がマレーシアを去って行った。キリスト教諸教会にとっては試練の時だっただろうが、教会活動は衰退するどころか、マレーシア人聖職者を中心に土着化は確実に進み今日に至っている。聖公会やカソリックでは都市部に重点があり、聖職者の多くは華人系が占めているが、ボルネオ福音伝道教会はダヤク出身者が中核を担っている。

華人系の人々の多くは、現在も統計資料では仏教・道教などに分類される中国大陸土着の信仰体系によって宗教行事や年中行事を行っている。サラワクの場合、キリスト教徒の割合はおよそ36%、サバの場合はおよそ33%だが、若い世代を中心にキリスト教徒の割合は徐々に増加しつつあるという。華人系の人々もかつての中国大陸からの出稼ぎ移民である“華僑”からサラワク、サバへの土着化が進行しており、生活様式も現代のサラワク、サバの現代生活に適応したものになりつつある。そうした変化の過程でキリスト教への改宗は象徴的な選択なのかも知れない。

4. ボルネオの社会変化とキリスト教

キリスト教への改宗は布教を進めたキリスト教教会にとってだけでなく、改宗したダヤクの人々にとっても大きな変化を受け入れることだった。教会側の布教は、キリスト教が及んでいない未開地の未開人異教徒（Heathen）へ、キリスト教信仰の福音を伝道し、改宗を促すとともに生活様式を大きく変化させることだった。このため、聖書の教えを伝えるだけでなく、医療・教育、調理衛生など日常生活に関わるさまざまな「近代科学の成果」を伝えた。同時に近代建築技術によって教会堂、学校、集会所などを建設、これまでと異なる建築技術と建築様式

は大きな社会変化の予期させるものだった。教会自身がキリスト教の布教活動史を描く時、しばしばキリスト教への改宗を「夜明け」ということばで表現する。ボルネオ福音伝道教会の布教史は、改宗前の「夜明け前」を「酔っ払い」と表現している。度々くり返される教会自身によるこうした言説は、布教活動に対する教会自身の評価を表現したものである。

他方、クラビットの事例に典型的に示されているように、内陸山地民社会にとっては布教ミッションの到来は、それまでの生活慣習にはなかった多くの物資と観念をもたらした。キリスト教ミッションは信仰だけでなく、近代建築やさまざまな利器・道具類、食物など物質文化、さらに金銭と商取引や近代的教育観念、文字や筆記された文章・計算法、外部社会に関するさまざまな知見、などなどさまざまなものを伝え、思考様式や世界観にまで広範な影響を及ぼした。見慣れない教会建築や宣教師達の服装に外部から押し寄せる社会変化の予兆を見たであろうが、同時に多くの拒絶反応や反発も引き起こしたであろうと想像される。

では、サラワク、サバがイギリス植民地行政の影響下、社会変化を受けつつあった同じ時期、カリマンタンはどのような状況におかれていたのだろうか。19世紀半ば、ボルネオ北部にイギリスの影響が及んだことにより、オランダ領インド（現インドネシア）の植民地政府は急遽ボルネオ南部から海岸沿いに行政権の拡大を図った。ポンティアナック、バンジャルマシン、クタイ、サマリダなど海岸沿いに勢力を持っていた在地権力（スルタン）を硬軟さまざまな手段によって支配下に置いていったが、内陸山地は時折行政官とパトロールが巡回する程度で本格的支配は及ばなかった。カリマンタンはボルネオ総面積の三分の二に及び、熱帯雨林に覆われた湿地と山岳地の移動はきわめて難しかった上に、首狩慣行を残す野蛮な山地住民ダヤクの集落（杭上長屋）は広大な山地に分散し、危険で近づけなかった。首狩慣行は植民地政府が禁圧した後も20世紀半ばまで行われた。キリスト教の布教活動は行われていたが、同様の事情できわめて緩慢なもので、広大なカリマンタン全体に及ぶのは20世紀末になってからである。

インドネシア独立後も、スハルト政権成立後の1970年代に本格化する森林開発が及ぶまでカリマンタン内陸部は“未開地”のまま残されていた。このため、カリマンタンの本格的な社会変化、あるいは近代化、商品経済の波及は20世紀後半以降のことで、サラワク、サバと比べると大きく遅れただけでなく、その変化はきわめて急激に起きたものである。急激な社会変化に対してはダヤクとマドゥラ人の“民族対立”など、東マレーシア（サラワク、サバ）と異なるさまざまな事件と問題が起きている。しかし、今日の東マレーシア社会とカリマンタン社会のもっとも大きな違いは、山地民ダヤクをめぐる状況である。カリマンタン・ダヤクは西カリマンタンだけでも少なくとも120を超える“民族”集団に分類され、カリマンタン全体では300を優に超える集団に分かれると推定されるが、山地民社会はそれら小集団毎にまとまるよりは「ダヤク」として包括的なまとまりを作ることが多い。特に地方政治の中ではそうである。

同じように「ダヤク」という名称が使われるサラワク、サバでは「ダヤク」という民族集団は存在しない。今日の東マレーシアでは、山地民をダヤクと総称することはあっても、集团的まとまりもアイデンティティも、イバン、ビダユ、クラビットなどである。この事実は、ビダユはもっぱら聖公会の布教地域に住み、イバンの多くが住む地域はカソリックに割り当てられた布教地域だったことと関連するかも知れない。また、クラビットという植民地時代に生み出された民族集団が行政上の誤解から生じたものだったとしても、ボルネオ福音伝道教会の布教が集団としてのまとまり、アイデンティティの形成に大きな役割を果たした事実は否定出来ない。

イギリス植民地時代に早くから組織的布教が進められた東マレーシアと異なり、イスラムが主流のインドネシア領カリマンタンではキリスト教の組織的な布教活動は大きく遅れ、スハルト時代の開発政策の進展にともない加速した。しかし、ジャワやバリ、南スラウェシなどからの大量のイスラム教徒国内移民の流入により、山地民は周縁的なマイノリティーへと追いやられた。インドネシア全体の姿と同様、そして東マレーシアと異なり、カリマンタンのキリスト教徒は少数派なのである。

このように、マクロな視点から見ると、キリスト教の布教と浸透はボルネオ山地民社会に大きな影響を与え、現代社会とりわけ民族集団、民族意識の形成に大きな影響を与えてきたと言えるだろう。そして、キリスト教会の誇らしげな言説のように、キリスト教改宗はボルネオ社会に歴史的に大きな断絶を生み出したことになる。しかし、では逆に 1970 年代以降のおよそ 30 年ばかりの間に起きたボルネオ諸社会の急激な変化はキリスト教の布教がもたらしたものだと言えるだろうか。サラワク・ビダユのキリスト教化について前出のチュアは、日常生活に見るビダユの改宗は過去との断絶ではなく、さまざまな矛盾やディレンマをかかえつつもビダユ文化の連続性の中でとらえるべきではないかと主張する (Chua 2012)。事実、キリスト教入信によって否定されたはずのガワイ儀礼はビダユ伝統文化の象徴とされ、ビダユのアイデンティティの形成、維持にとって不可欠なものとして尊重されている。サラワク州では 6 月 1 日を「ガワイ・ダヤク (Gawai Dayak)」と呼ぶ祭日 (休日) としている^①。

こうした文化の連続性と不連続性について、ジョー・ロビンズは人類学のキリスト教研究が、キリスト教そのもの、キリスト教の布教活動そのものよりもキリスト教化による断絶、文化の不連続性に視点を置いたため「キリスト教の人類学」を逸脱してしまったのではないかと見ている。また、キリスト教会にとっての時間軸と人類学者側の時間軸にはずれがあることも指摘する (Robbins 2007)。チュアも指摘するように、古くからの村落 (杭上長屋) 生活が学校教育や商品経済などの影響で変化する中で、いわば日常生活の中の選択としてキリスト教に入信するビダユの人々と、入信による過去との断絶を求める教会側、さらに研究者側とはそれぞれ異なる時間軸で思考している。人類学者のキリスト教研究の背景には、おそらくキリスト教布教を十分に「異文化」としてとらえ切れない人類学者側の欧米中心的な思考様式がそれと自覚せずに入り込んでいるのだろう。

ボルネオのキリスト教布教は多様な側面を持っている。宗教信仰はもちろんのこと、近代化、社会変化、植民地時代、国家と民族意識、……などさまざまなキーワードを与えることが出来る。いずれの視点も興味深い研究課題ではあるが、キリスト教とキリスト教布教そのものの研究という観点からは派生的問題との批判もあり得る。キリスト教という一つの課題としてとらえるなら、何よりもまずキリスト教諸教会の活動そのものに焦点を当てる方法を模索すべきだろう。改宗するにしても拒絶するにしても、ボルネオの人々にとってのキリスト教との関わりはまず何より日常生活の中にある問題である。キリスト教化しつつあるダヤクの生活もキリスト教教会活動も、研究者とは異なる観点と時間軸の上で行われており、その研究には異文化研究としての視点が重要となるだろう。

【注】

① 北カリマンタン州は東カリマンタン州から 2013 年に分離し設置された。

② ボルネオでの最初のキリスト教布教は 17 世紀末とされているが、ポルトガルとオランダの交易権争

いやバンジャルマシン・スルタンとの争いの影響から長くは続かなかった (Baier 1995: 77-78)。

- ③ 2000 年から 2001 年にかけて中部カリマンタン州と西カリマンタン州を中心に起きたダヤクによる外来マドゥラ人に対する「首狩襲撃事件」がもっとも顕著な事件で (石井 2002 参照)、外来民に対する山地民ダヤクの反発は強い。これらの事件は一般に「民族対立事件」として報道され、イスラム教徒に対するキリスト教徒の襲撃として報道されることはなかった。
- ④ Jakarta Post 2013.2.13 記事による。
- ⑤ あくまで推測に過ぎない。なぜなら法制上は異教徒間の婚姻は承認されず、男女どちらか一方が改宗することが婚姻受理の前提条件になるため、異教徒間の婚姻は人口統計などに数値として表れない。この点はマレーシアも同様である。
- ⑥ 本稿は科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 「マレー人との共棲関係から見たボルネオ・ダヤクの山地民意識の社会人類学的研究」 (研究代表者: 石井眞夫 (課題番号 22510820) 平成 22 年度～24 年度) および科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 「ボルネオ民族意識形成へのキリスト教ミッション活動の影響に関する社会人類学的研究」 (研究代表者: 石井眞夫 (課題番号 25370941) 平成 25 年度～27 年度) による現地調査によって収集した資料にもとづいている。
- ⑦ 2010 年センサス (*Population and Housing Census of Malaysia 2010: Population Distribution and Basic Demographic Characteristics*) による。以下同様。
- ⑧ 山地民と平地民の関係、サラワク民族集団の成立過程についてはすでに詳述した (石井 2009, 2012)。また、ブルック三代の宗教政策については、Tan Jin Huat 2012 に詳しく記述されている。
- ⑨ ドイツ系のルター派 (あるいはルテラン派) の教会で、19 世紀前半から Basel Evangelical Missionary Society として布教を始め、アジアでは 1847 年から中国大陸南部で布教を始めたという。
- ⑩ Rooney 1981: 108-109、カソリックに限らず、信者数の正確なデータはほとんど存在しない。センサス・データは自己申告によるものだが、キリスト教徒であっても所属教派・教会についてのデータはない。また、例えば末日聖徒イエス・キリスト教会 (モルモン教) をキリスト教に含めるかどうかなど、「キリスト教会」「キリスト教徒」に決まった定義はない。教会自身の数字は、信者獲得数を多めに見積もる傾向があるが、それにしてもどこまでを信者とするか、教会自身が明確でない場合もある。聞き取り調査に際しても、教会本部は正確な実情や信者数を把握出来ていないことが多かった。なお、東マレーシアでのカソリック布教史については、Rooney 前掲書の他 O'Flaherty 2001 も詳しい。
- ⑪ ビダユも首狩慣習を持ち、サラワクのダヤクの中で取り立てて温和だったわけではないが、ブルック政府に従順だったことからそうしたイメージがつけられた。
- ⑫ ボルネオ福音伝道教会の活動と歴史については、やや古いのが、Lees 1979 に詳しく描かれている。
- ⑬ カナダ・ヒル (Canada Hill) は、1910 年にボルネオ最初の油田が建設された丘で、この丘で油田労働者を差配していたのがカナダ人だったためこう呼ばれているという。現在は最初の油田の櫓 (Grand Old Lady と呼ばれている) が保存され、隣接地には石油博物館が建っている。わずかな漁村があっただけの未開湿地にミリ市が発展したのは油田発見と石油採掘によるもので、現在も東南アジア有数の石油関連産業都市として栄えている。カナダ・ヒルはミリ市の歴史と近代化、発展のシンボルであり、市街地から南シナ海を見晴らせる丘の上はミリ市を代表する観光スポットになっている。
- ⑭ 収穫祭 (Harvest Festival) とされている。Gawai とは焼畑による陸稲栽培サイクルで、これはビダユに限らず多くの山地民ダヤクに共通する慣習である。イバン中心になっているという批判はあるが、理念的には全ダヤク共通の祝日とされている。

【引用文献】

- Amster, Matthew H.
 1999 "Tradition, Ethnicity, and Change: Kelabit Practice of Name Changing," *Sarawak Museum Journal* Vol.54 (n.s. No.75): pp. 183-200
 Baier, Martin
 1995 "Ventimiglia: Indonesia's First Bishop Lost in the Jungles of Borneo Three Hundred Years Ago," in *From*

- Buckfast to Borneo: Essays Presented to Father Robert Nicholl on the 85 th Anniversary of His Birth 27 March 1995*,
Kuching, Sarawak Literary Society
- Bala, Poline
2002 *Changing Borders and Identities in the Kelabit Highlands: Anthropological Reflections on Growing Up in a Kelabit Village Near the International Border* (Dayak Studies Contemporary Society Series No.1, Institute of East Asian Studies), Kota Samarahan: Unit Penerbitan Universiti Malaysia Sarawak
- Barker, Hohn
2008 “Toward an Anthropology of Christianity,” *American Anthropologist* Vol.110-3: pp.272-292
(The) Basel Christian Church of Malaysia, Sandakan
n.d. *100 Years of Blessing, Pressing Onward in Ministry, Sandakan: The Basel Christian Church of Malaysia*, Sandakan
- Cannell, Fenella
2005 “The Christianity of Anthropology,” *Journal of Royal Anthropological Institute* (N.S.) Vol.11: pp.335-356
- Chua, Liana
2012 “Conversion, Continuity, and Moral Dilemmas among Christian Bidayus,” *American Ethnologist* Vol.39-3: pp.511-526
- Connolly, Jennifer
2009 “Forbidden Intimacies: Christian-Muslim Inter-marriage in East Kalimantan, Indonesia,” *American Ethnologist* Vol.36-3: pp.492-506
- Department of Statistics Malaysia
2011 *Population and Housing Census of Malaysia 2010: Population Distribution and Basic Demographic Characteristics*, Department of Statistics Malaysia
- Ishii, Masao (石井真夫)
1998 「南メラネシアにおけるキリスト教信仰と受容形態の変容」、三重大学人文学部『人文論叢』第 15 号：pp.1-16
2002 「カリマンタン首狩と国家：民族対立抗争の政治人類学」、三重大学人文学部『人文論叢』第 19 号：pp.13-29
2009 「東マレーシア、サラワク州の“中規模”民族集団：サラワク地方政治の中で」、日本国際文化学会年報『インターカルチュラル』Vol.7、アカデミア出版
2012 「ボルネオ・ダイヤキズムと山地民の生態：マレーとダヤクの対比の中で」、三重大学『人文論叢』第 29 号：pp.13-25
- Lees, Shirley
1979 *Drunk Before Dawn*, Singapore: Overseas Missionary Fellowship
- O’Flaherty, Brother Albinus
2001 *A New Dawn: History of the Archdiocese of Kuching (1976-2001)*, Kuching: Archbishop of Kuching
- Rooney, John
1981 *Khabar Gembira: A History of the Catholic Church in East Malaysia and Brunei, 1880-1976*, London & Kota Kinabalu: Burns & Oates Ltd, Mill Hill Missionaries
- Tan Jin Huat
2012 *Brookes, the British, and Christianity: Christian Missions and the State in Sarawak, 1841-1963*, Singapore: Genesis Books
- Sagua Batu Bala
2013 *Kelabits’ Story: The Great Transition*, Singapore: Trafford Publishing